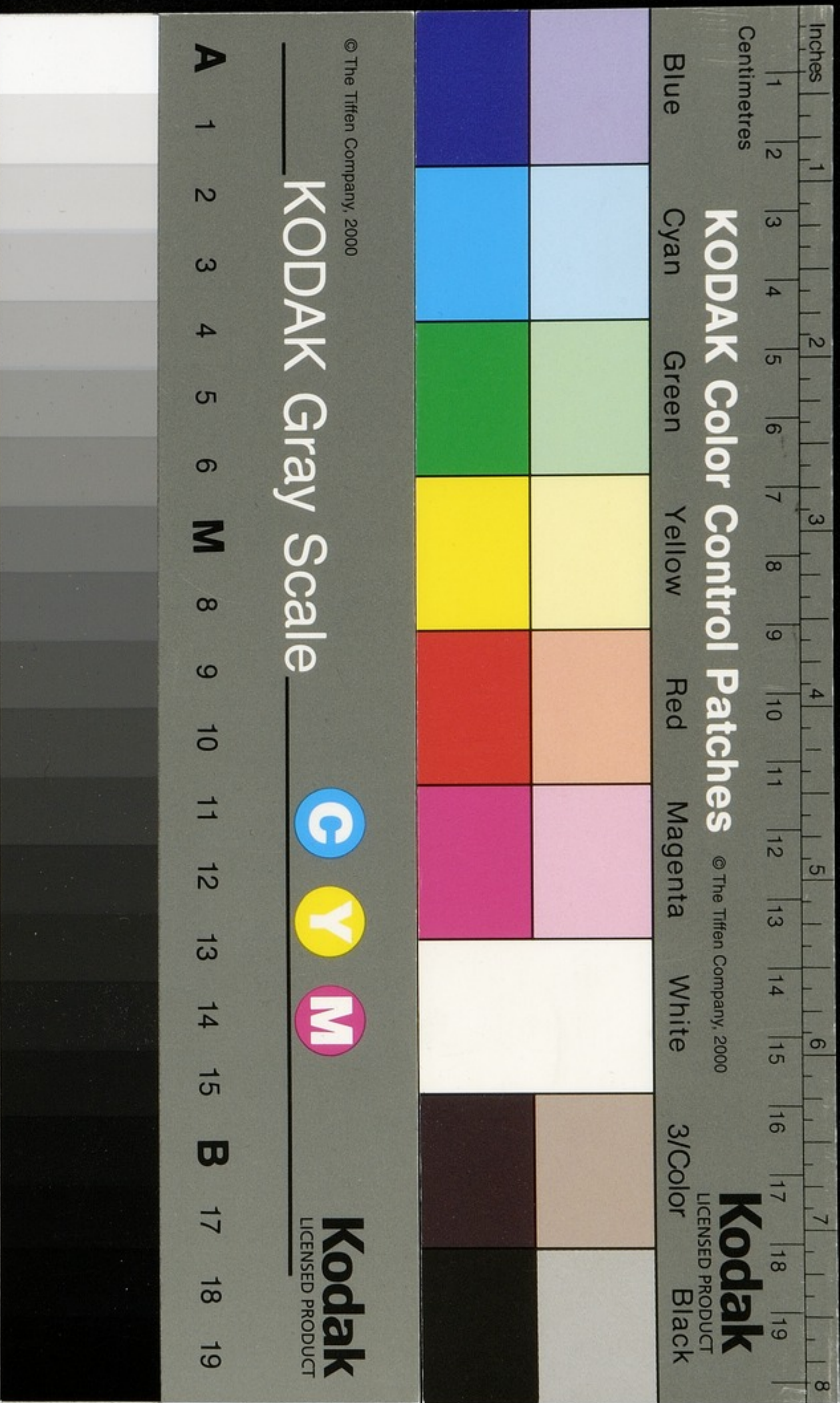




『椿説弓張月』拾遺五

鎮西八郎 椿説弓張月拾遺卷之五
爲朝外傳

東都

曲亭主人編次

第五十六回

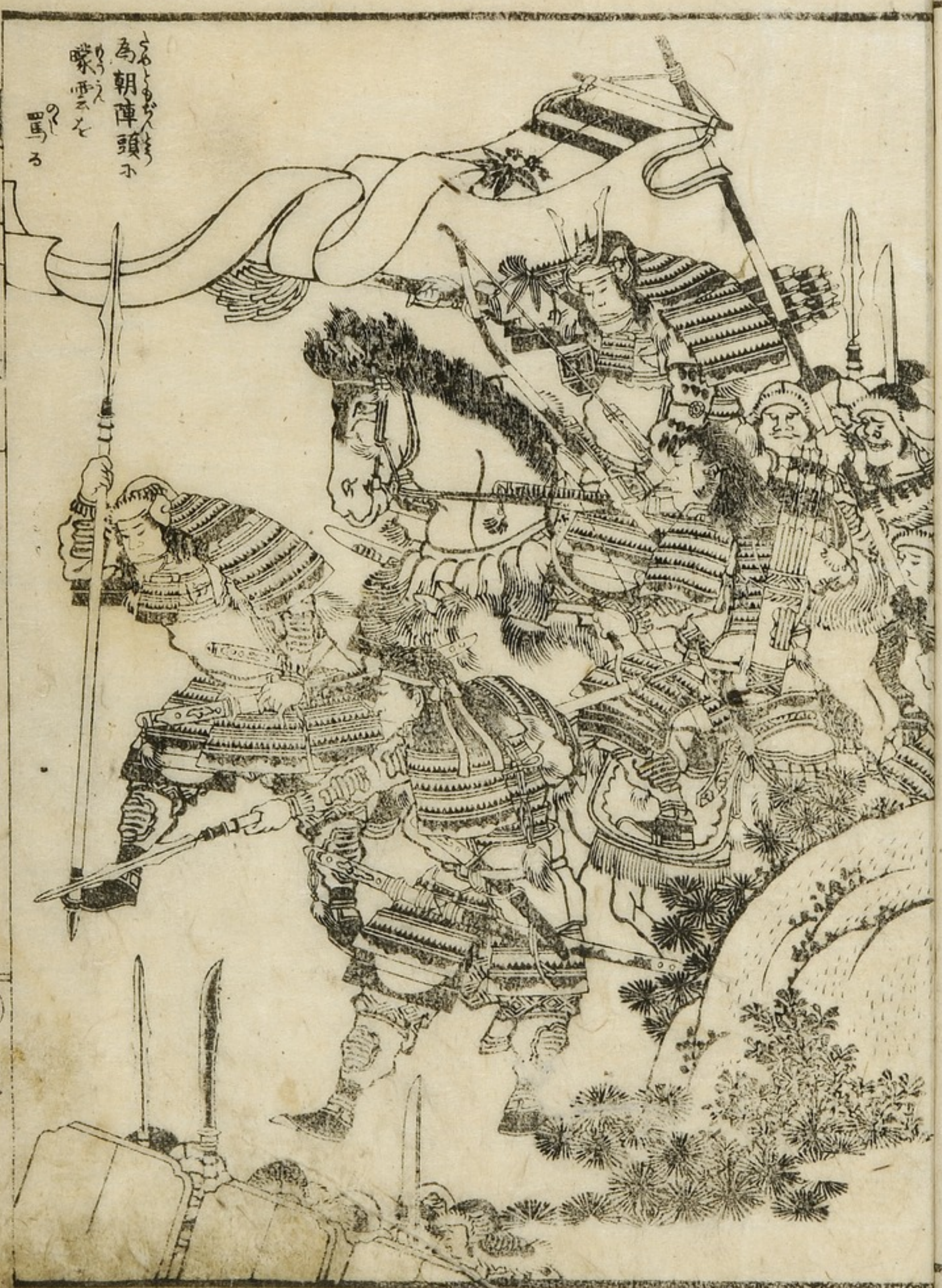
嶋倭を塞れて矇雲爲朝を焼
餘煙を拂く王女良人を索

爲朝の武威中山を動し。逃れを追めてさむむ殺し。輒々名虎山を
取て要害とし。亦龍宮城を攻んとて。うち出さるる。斥候をせかり。
矇雲とて。数百騎。おて金城まで出たり。と報知する。爲朝
父もあつた。大に飲ひ。松壽をえかりて。宴するやう。これ頃日地圖
を閲する。彼金城と龍宮城の西南にありて。大里に背あり。
これ今その前より攻む。王女後よりこれを襲む。一挙して矇雲を
擒とせん。と疑ひ。速におよそて。只當馬にやえし。人々

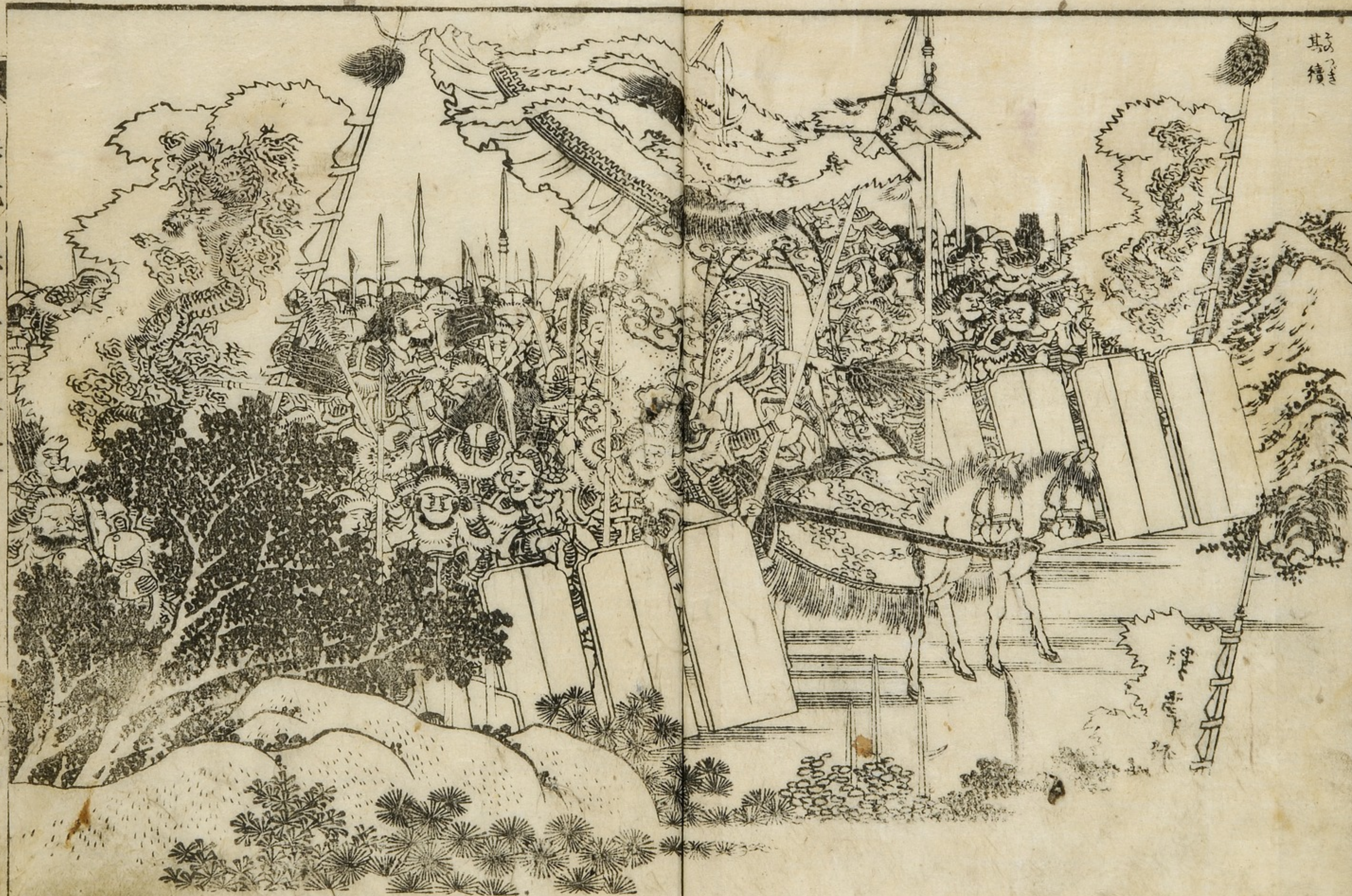


松壽亦速てまうけやう。矇雲とよく人の胸中を察し千里の外をあるの術あり。大将ハ且くこの所ハ陣をせられず。黿亀あこれハ好し。てその剛臆を試みる人けし。とまうけやう。朝にうら掉て黿亀ハ年ころくして矇雲ハ敵手に足るに為朝ころくこれハ好し。豫ての計畧合期也。軍師の異見思ふ過く。これハおのづから所分なり。と回答もあへて鞭を揚馬の足掻を急じ。多くハ士卒の勇氣日す。はして早雄の壮俊ホも後れ。と相従ふ。抑金城ハ方数十町の曠原あり。馬のかけ引便よく。東ハ崎山あり。北ハ長川あり。その地山南ハ相鄰りて大里へ遠く。この辺ハこれ代ハの國王出挂の地方也。して左ハ金城橋あり。右ハ翠巖亭あり。為朝既ハ矇雲ハ陣にころく馬ハ駐て前面を詰とえ。人ハ群立。これ賊軍四五百騎。忽地二隊ハ相ころく推し。四輪車ハ黄羅傘蓋挿かりて。鼓ハ吹をころく。左ハ棟孫あり。右ハ奇律之あり。車のうちハ賊將矇雲頭ハ流星巾を戴きて。身ハ蛇皮の法衣。羽着下し。肩ハ竹布の袈裟を掛。ハ羽扇を合。ころく。そのこれ兩軍鼓を鳴らし。陣の声ハあ。それハ朝ハ亦黿亀ハ左右ハ從て馬を跳し。馳出。大將その日の出立。ハ花曇子の真紅ハ染るし。これ鎧直垂ハ紫系の禮金物重く打。これハ透。なる。著下し。白星の五枚兜の吹返。日光月光の二天子ハ金と銀。ハ彫出。て打。ハ猪鬃ハ著。保元の合戦ハ嚴父ハ義朝臣。新院より拾。これハ鷄の丸。金幣の圓鞘の名劔ハ。之ハ太刀ハ佩添。ころく。之ハ尾の矢ハ十六指。これを名高ハ肩。ハ。

重藤の弓の握太なれ真中把て黄尾毛の馬の太く逞しに小孫
 龍膽を金具ふ摩する鞍を置け尊徳の鞍の雄しうなりなる
 かけて白旗の下にまゐるその形勢あつて拵つてこの國人を目小
 馴とぬ武者態威あつて猛うに天晴大將軍やとぞろりに自方も
 敵もあゝあて感嘆せざるなりけり。當下為朝ハ鎧踏張り鞍
 壺小突立あがりて。曙雲を信と眼へ狗黨の悪僧いかなれば妖術を
 逞し。尚寧王を執逆して久く王宮を踏めしに孰もその暴悪を
 憎ざらん武名ハ荒磯をう浪の音にもまふ目やもえよ大日本
 清和の嫡流ハ郎為朝とてふなり。そが王女の縁ふおぼれ
 去年逆臣利勇を誅し。この秋更にお我兵を起して汝を討て三省の
 民の塗炭を救ふのなり。けり露るものもその非を悔ひ天罰脱れ



為朝陣頭ハ
 曙雲を
 罵る



かゝるをあらば面縛して刃受よと声高き罵り多し。矇雲呵（あ）こ
とらち笑ひ汝は是東方の浮浪人ぞのちれ正かたき。この國へ漂
き。王女と密通して國王の婿と稱し勢ひに乗じて大臣を殺し王子を
逐つて山南を押領せよ。その惡公虎狼も勝れり。それ些の兵を遣して
生拘耳さんとあひしが石機も暇なけしは年暮放しおれられふ。
みづろも耳はるへ夏虫の火虫が燈より々々似たり。誰かある。這奴等
それと下知されけりけり。と回答つ。矇雲が左右なりけり棟孫
奇律之二騎相並んで奔くと馬よりそれば朝怒て些も礙せよ。
ふづろ戦人とあふふ。飛龍推隔て衝と馳出迎ふ。みづろ戦人
あひし人もせよと戦へ。賊の両脇ちうら衰へ馬を飛ばして引くを
寄す。敵の大勢なりねをこえ侮りてありけり。今鶴亀の一陣ふ

刺崩ををえていよく勇に勝誇られ癖なれ。只直推し追ふ。矇雲
矇雲騒ぐ。氣もな。空中を指招け。一朶の鳥雲まゝ降。雲
雲の中に一軍の異形の人馬立頭れ進む。寄す。とけ。縦横
を尋ね戦へ。松壽下知して齋なれ。汚穢りのを柄な。瓢お
汲うけ。さしてと。と。汝か。矇雲。魔軍紛。と。地。と。
墮。と。は。く。それ。或。青。紙。を。剪。て。兵。の。形。と。し。あ。ひ。
蒙。束。縛。て。馬。と。せ。り。され。む。こ。矇。賊。が。妖。の。皮。を。剥。け。れ。と。く
生。拘。れ。と。大。將。の。烈。き。下。知。諸。軍。兵。服。を。く。し。閑。火。揚。透。間。も
な。競。ひ。か。れ。折。し。も。め。れ。矇。雲。が。後。陣。の。う。こ。よ。り。乱。し。騒。げ。ふ。
妖。術。施。す。由。な。く。て。や。矇。雲。も。車。が。か。へ。て。慌。忙。き。脱。れ。と。を。朝
これ。を。商。し。て。賊。の。後。陣。より。乱。々。へ。搦。ま。の。軍。兵。出。す。り。て。その。背

より襲ふなれど。さや東北のこを指塞に城へな入れそと采配
 うち揮身方に先づら。矇雲が車小眼をわけ追撃する。賊軍
 いよく途を失ひ。龍宮城へを移る。長川をさして逃走れむ。
 達一返せと。嚙とめて大将ふづら。追蒐する。松葉をころり
 なくて。矇雲かき。流の計あつた。且くさき。ひと声
 かき。に叫ぶ。も。為朝さ。耳にもわけ。中山山南の境。茂林
 のほとりに到る。忽地。矇雲をえりし。士卒おのく。後
 まひて。左。右。と。躊躇。折。う。天。俄。頃。結。陰。日。高。く。野。干。玉
 の。圍。より。圍。お。入。る。と。く。大。將。と。士。卒。と。あ。ら。に。士。卒。の。大。將。と。え。て。風
 さ。入。り。も。烈。し。山。鳴。動。て。樹。を。倒。し。砂。と。飛。て。面。を。う。り。あ。ま
 ぶ。あ。ま。に。も。堪。が。る。も。前。後。左。右。の。賊。兵。起。つ。る。朝。を。逃。る。と。

異口同音に。びうけて。射る。箭。を。雨。より。ふ。は。繁。し。今。す。て。勇。る
 身方の軍兵。膽を冷さ。び。とい。り。の。お。或。は。乱。箭。を。射。倒。され。
 あ。ひ。の。株。お。折。き。倒。れ。お。の。が。刃。お。刺。傷。られ。死。る。り。の。い。く。ぐ。と
 い。の。あ。ま。に。松。壽。鶴。龜。お。も。賊。軍。に。け。隔。ら。る。ん。為。朝。へ。と。く
 一騎。お。な。り。た。ま。ひ。し。けれ。ど。實。よ。れ。鎧。を。急。め。へ。る。前。一。條。も
 う。い。か。ど。馬。を。さ。ひ。お。急。な。り。じ。く。其。首。も。あ。ら。に。数。十
 町。幸。じて。走。り。な。す。あ。火。光。幽。ふ。え。え。り。此。一。活。れ。る。と。し
 て。彼。火。を。目。標。ふ。と。く。して。走。り。着。て。え。る。あ。人。家。あ。ら。あ。ら
 ぶ。して。い。とも。梢。高。れ。森。の。中。に。燈。籠。を。掛。け。る。り。暖。圍。な。れ。が
 う。枯。せ。ぬ。草。葉。長。く。生。茂。る。り。古。廟。う。と。え。れ。ば。廟。も。は。こ。い
 何。処。あ。ら。ん。と。て。僅。よ。て。と。と。燈。火。あ。て。彼。此。を。え。く。て。と。と。め。む。



鳴る
袋
朝
火
表

樹下ふ勝余ありて嶋袋の二字以て写し。その下に朱よりて細書
為朝々に到て死と書されば讀も終らざと大に驚れた。この
所と山南ふ属して大里へ遠くと縁と高き山は包れて東一方を
て歩むれ門なし。さるにふ嶋袋といふ名はけしき。され圍まふ
惑ひてあつども。さふ走り入りされば敵り出門を切塞んに。
いふゆして脱とあるを危い。とひとり言して響を引之し。
馳走んとし。さふ瞬雲豫てさるる人忽地夥の柴よりて出べ
門を塞だよけと。為朝とさるる驚馬に馬より閃りと飛び
下りつ。山のごとくに積められ柴掻退んとし。さふ怪しいま
件の燈籠おのぼる撲地と落。その火八方に散り乱して秋の螢
の飛びさる。樹の枝草系いへばさらなり。さや彼積る柴の中

らつて燭くと燃あがれ山風ゆき吹荒ま。猛火四面に
散乱さ馬とこれお駭れ狂ひて地めり馳かり尾筒を焼と煙
ふ噴ひ賊かりり。斃さる。為朝は水陸の軍お熟て万夫を當
の勇将なれども火を脱れぬ術な。てあじが経ひらり。さる
拂ひ多きども。その刃金石おあざれ上差の征箭鎧の威毛直垂
の袖までも悉焼断離られ烈火の中にまゐ。その形勢は正ふ足
駿河の牧は田獵せ。日本武尊に似え。され吹くを風もあて。
今ハつとわけ世く。鵲の丸の劔は抜。腹帯剪て鎧投とて。
天を仰て嘆息。時さる。命けられ保元の乱より死と。死
命はいくたび脱れてるに漂著し。今妖賊が幻術お火攻せられて
あへなくも。武名を他の國に墮と。あへ朽と。叫びさる。声のと煙

の中に於て今を限りと見えり。さるに王女の大里の山
路より。礫雲が持を襲へんとて。まづ間諜者なりて。合戦のやうを
はじり。あふ。そのの走り。かりき。八郎按司の大軍戦ふ。毎ふ
勝お。あふ。と。いふ。浦添宜野湾の両城を攻め。既に
赤平。すて。殺入。り。あひぬ。と。告。め。け。し。ば。さ。ら。ば。い。と。げ。て。百騎を
残し。あふ。大里の城を。す。じ。儀。翰。田。平。以下。二。百。騎。が。將。て。溜
中。ふ。山。路。二。里。む。り。進。こ。ふ。ふ。忽。地。日。の。光。暗。く。る。隨。は。嶋。袋
のか。に。あ。り。て。猛。火。天。を。衝。て。燃。あ。れ。ば。王。女。ふ。り。怪。て。あ。れ。を
い。ふ。と。む。り。も。馬。を。駐。め。て。え。り。あ。ふ。結。越。は。大。里。の。城。を。さ。る
軍。兵。亦。半。身。血。を。塗。れ。て。走。り。あ。ふ。息。も。喘。め。さ。ま。う。け。や。う。さ。て
も。礫。雲。が。大。將。耳。目。官。全。廣。が。四。五。百。の。軍。兵。天。より。や。降。る。ん。地

より。や。涌。ち。ん。王。女。の。城。を。出。る。ふ。穴。窺。ひ。知。る。直。く。と。推。考。せ。し。ま
叫。で。攻。め。る。ふ。城。中。以。の。外。に。全。勢。な。れ。ば。命。を。限。り。に。防。ぎ。戦。へ
る。も。力。彼。の。敵。が。城。兵。悉。く。討。死。せ。り。吾。等。の。律。の。勢。を。あ。り。さ。ん
と。走。り。ま。け。る。及。さ。か。人。の。い。ふ。を。ま。ふ。小。祿。の。峯。南。風。原。東。風。平
の。城。な。ん。ど。も。敵。が。棄。れ。れ。り。と。す。り。し。れ。と。半。々。け。田。平。儀。翰。亦
こ。ろ。く。い。ふ。と。吊。れ。果。士。卒。送。お。面。を。あ。い。し。進。退。究。て。え。る。と。れ
折。り。礫。雲。が。大。將。棟。孫。捷。路。より。は。じ。り。人。数。百。の。軍。兵。忽。然
と。前。面。の。峯。上。に。立。あ。り。れ。は。あ。ふ。と。や。為。朝。と。長。川。の。や。う
あ。て。一。千。の。士。卒。妙。り。形。勢。と。れ。竟。お。嶋。袋。に。感。ひ。入。り。て。猛。火
の。う。ち。あ。ふ。と。あ。け。は。灰。燼。と。な。り。て。う。せ。ね。る。に。命。を。う。け。寧。王。女
を。擲。出。り。て。降。ふ。と。せ。よ。と。叫。る。声。は。谷。を。穿。き。磯。を。穿。き。駭。く

真逆おとしに馳すれば王女を馬と馳あらし小こぶしれかみ風の
輦。牙ハこの國の寧王女武名と良人ともい裏く白縫姫と云ふ
ざるや。女子とて侮らば目おおせん。と會する薙刀水車の如く
うち繞り近づく敵をかけ惱し。ぞうぞんと斫伏せしめ案内
あつゝれ賊兵ホ是首の樹の蔭彼首の巖角お立ちし射る箭
と冬蝋の花ぶごぞ。これぞ防ぎか。うら後方よりも賊將全廣
大里の城を攻おとし王女を追留め擒ふせん。と夥の軍兵を引卒し
咄と嘯てとせられ身方すく辟易して又小戦ふる終なく
熱心活路を索うて射ておとされ死するのその数をあはれそが
中ふ儀翰田平ハ王女を落しすか。せん為ふ二騎相とれと進み
退つて儀翰と棟孫が前面は立向ひ田平ハ全廣を遮り留めて

且く挑戦ふとしども身方悉落らせて外小援の兵がければ二人
りあとも射とくわられて乱軍の中に討死せり。その隙ハ王女ハ一方
の國を破ひて走りあふ。を替留人と追蒐れ敵近ければ
くくして薙刀とりて切るとひ退けハ亦馬とをやめ。二里の山路を
黄昏うへほで賊兵おあつれつ。とて死と人れ命なりとも
良人の先途を見定めて。とこころ一とち二條の流矢ハ馬ハ射
して歩行ふなり。あひつ。嶋袋を投て走り。とてあ。その日も
既ハ暮果て敵も中ややく遠くなりぬ。子四つ。とてあ。とてあ。
孝じて走りあき。是処うとむりえ。あへ。草木。とてあ。とてあ。
なりて。巖石の。とてあ。とてあ。とてあ。とてあ。とてあ。とてあ。
と煙の中ハ横り。同じあ。とてあ。とてあ。とてあ。とてあ。とてあ。

えあふえん
王女血戦

脱
囿
雲

春
記
日
月
抄
巻
之
五



春
記
日
月
抄
巻
之
五

而中亦彼田單が火牛喘ぐに似たり。うらかなしくもつる丈夫の
亡骸やうらなれと薙刀をりて灰木を掻きまじつて索いりて
こゝに為朝の乗るひねる馬とおぼくして鬣尾毛焼かすりて
いと浅ましくも弊れり。この馬既おかくのごとし主もいそ
ろ存命めり人鎧の金具のこびりておん白骨のええあまのねま
敵の爲めおろしれられ飲はしや最期も後々ともおはじ煙と
あしてつる誠心をあじけし人。寔に君と日の本れ王孫名家の
曹司とせられし人。果報微く。故國おその身を容れらるるを海に
浮して亦この邦の乱れと討ちせんとして。稍逆臣と誅戮し。仁義の
軍人起し。人々神も憐れと見え。冥助を報ゆるをせぬ世を
さるるぬの桑の弓。折れてうひやう。妖賊が計策に乗られて猛火の

中お焼れし。武運の末は是非もは。おりひ馬れば七年の月日
もあはじ。金陽月小琉球の嶋北あて。つるのを救ひし。みづと
良人を救ひし。を焼野の雉子つまこひふ。音とのこぞなくかひるや
と声限りおかれは説く。男子もつるの賢妻勇婦も。つる
れて涌る涙の石湯掬め。と黄々泉へおろし。人として半焼
巨木の枝に。あつて。烈火の中へ飛入る人。は死なれ
馬の腹の中より。ややすらふへと。嘆び。え。遠出する。朝し。
王女おひく。げられ。且怪し。且飲び。この恙。あて。せ。飲。と。忙
あ。走りより。同べ。る。も。つ。く。ふ。好。う。ひ。袖。を。ぬ。じ。う。め。を。
為朝も亦王女の只ひとり。索ま。る。の。妖。怪。で。ま。づ。その。故。を。問。ふ。べ。
王女。大里山の。あ。ま。こ。めて。前後の敵。お。攻。め。て。つ。れ。儀。輪。田。平。亦。を。

とじ兒にして士卒多く討死。大里以下の城は全廣に奪集せしむりと
 首尾を告ぐるべし。為朝頻に嘆息。つゞいても亦矇雲が幻術は
 とうとうれて。松壽の龜が生死存亡ともあらずに。白日俄頃、黒夜
 とありて。おりのどこの嶋に依り惑ひ入り。遂に火攻せられ。脱れ
 ざるもあらず。されば今へかうとぞひ定めて刃を腹におく。當に
 信とぞひく。そこをりて死なれ。馬の腹を截割。その血を吸て
 咽喉を潤し。馬の腸を爬出して。その腹中を躲れ。かば辛く
 猛火を焼く。火をおのづから討つ。しが敵にあらざればとあり。あ
 か。つや今までも出ざりぬ。あうれおん。身も又賊軍を殺脱て。
 夫婦のうちに九死を生。一生をあひぬれ。と。天地神明の祐
 め。お似たり。凡功業はとてんとおりの。と。火をも踏水をも

入るに只堪がられを堪忍びて時の到るがまじりあをたふさ
 漢の高祖の七十餘戦も九里山の戦小勝く四百餘別をひたり
 され今松壽鶴亀あひ失ひて左右の翼なしといふも彼も
 又存命てふふあれずばひとりも聚ふ日もあらずといふ
 城すれ士卒移れてこの方へ寓れかともは夫婦が命を
 天おまうして脱れあひ脱て試んあうび賊兵出まうむ
 悔ともそのかひあるぞうとて生く人といそげたりとて
 王女の火急の時臨みて必死を脱れまひぬれ良人の頓智を
 感嘆し夫婦忙しく嶋袋をきり出て通衢走りあふゆく
 ともあふに詰且具志段のあやうな松山の磯ふまきなり
 あつれどもこの荒磯をむくへ波は小嶋もなくいと太きなり

蘆荻のそ敏あつて漁の蟹の台屋もあつた。既に餓腹とて。
今も一歩も運びがたければ。このいふせんとして。夫婦巖尻
へかけ。忙然として。中を折る。具志頭のかつた物の音とて。
舟人を捕捕と。といふ声間ちかく。多うとあつた。城の
軍兵一群。あつて。出た。朝夫婦。猛と。いふ。いふ。
疲れた。人へ。禦ぐに。さへ。前と海なり。後と敵の。寔に
脱と。かへ。な。蘆の中に。櫓の音。して。舟漕。と。と。あつた。
たが。忽地。訛。と。声。と。く。

濱の鳥。迹。都へ。か。い。づ。も。月。松山。ふ。音。と。の。ぞ。鳴。く。
それ。日本。の。瀬。岐。瀨。これ。琉球。具志頭。の。荒磯。も。お。は。名。
あ。お。君。さ。山。の。浦。お。あ。都へ。か。い。づ。も。船。賃。と。と。く。名。

と。い。く。と。と。か。い。づ。も。漁。ひ。ち。り。畢竟。く。に。船。奇。と。た。
その。人。を。あ。い。ん。と。な。づ。ば。拾遺。下。篇。の。と。づ。わ。小。解。か。と。を。讀。
得。て。知。る。べ。し。

椿説弓張月拾遺卷之五畢

拾遺篇十卷拾遺篇上下二帙拾遺篇下篇拾遺篇
 として一部の團圓全く肩をひそげ曲亭翁
 著作中の一大奇書拾遺篇として張月の右に劣る
 わるゝぞ尚普く主顧者官の高覽を庶幾のこ

書賈

平林堂主人 欽白

後冊

後集